

一九三〇年代、上海における聶耳（ニール）

岡崎 雄兒

一、はじめに

二〇〇四年夏、中国で開催されたサッカーのアジアカップで、中国人観衆が日本人選手に感情むき出しの激しいブーイングを行い、改めて中国人の「反日意識」の根強さがクロージアアップされた。このような「反日意識」の噴出について、メディアはその要因として様々な見方を示していたが、どれもこれも隔靴搔痒の感が否めなかった。しかしここで確かに言えることは、根底に近現代の日中両国の歴史が横たわっているという事実である。

日中両国は一九七二年九月に国交の正常化を果たした。それから三十余年が経過した今日、両国関係は急テンポで深まる経済貿易関係に比べ、政治面では首脳交流が途絶え、国民相互間の親近感が減じるなど、問題を抱えたままである。それは中国側からすれば、小泉首相の度重なる靖国神社参拝や日本軍が遺棄した化学兵器の毒ガス遺漏事故、日本人観光客の集団買春事件など彼らの感情を逆なでするような出来事があり、わが国側でも在日中国人による犯罪の増加などがあつて相互に信頼感を醸成しにくい状況になっているからである。

永遠の隣国である両国の関係が、こうした状態で続くのは好ましくないのは言うまでもなく、相互理解を深めることが焦眉の課題になっている所以である。

筆者はこれまで本研究誌に「聶耳（ニアール）——中国国歌作曲者と日本」（第五号）および「中華人民共和国国歌の成立過程研究」（同六号）を執筆した。二つの論文で抗日戦争をテーマにした映画主題歌の作曲者と日本との関係、またその主題歌が抗日戦争を闘う兵士や民衆を鼓舞し、その果たした役割から建国時に暫定国歌に指定され、さらに正式の国歌になった経過について考察した。

本稿ではこれら拙稿を踏まえて、国歌「義勇軍進行曲」（中国語では行進曲が進行曲になる）をはじめ聶耳の力強い革命歌曲がどのような時代背景のもとに誕生したのか、その歌曲の力強さの源となるものは何か、彼の創作活動の舞台になった一九三〇年代前半の上海での五年間の足跡をたどる中で、現代につながる日中関係の原点を探った。

二、上海へ

聶耳が生まれ育った中国西南の地、雲南省の昆明から上海に出て来たのは一九三〇年の七月である。十八歳だった。二人の兄、聶子明・聶叙倫が書いた回想録^{〔1〕}によれば、彼は正義感が強い子供だった。一九二九年七月に軍閥同士の争いによって火薬庫で数千人が死傷する痛ましい事故があり、聶耳は損害賠償を求める運動に積極的に参加した。そのため軍閥政府からマークされ逮捕の危険に遭遇した。逮捕が即、長期の拘留や死につながる汪政時代のことである。たまたま三番目の兄にたばこ卸商の上海支店勤務の話があり、代わりに聶耳が難を避けるため行くことになった。

上海といえば、外国人にもよく知られた都市である。めざましい経済発展が伝えられる中国にあつて、そのシンボル都市としてのイメージが与えられている。いまもつとも手軽に行ける外国として老若を問わず観光客の人気を集め、若い女性向けの雑誌には旧フランス租界の瀟洒な建物やファッション店、グルメ案内などが紹介される。

では聶耳が昆明から出てきた頃の上海はどのような状態であつたのだろうか？ 聶耳は昆明から鉄道でベトナムに抜け、香港を経由して上海にやって来た。辺境の小都市出身の聶耳は、黄浦江沿いのバンド（外灘）に立ち並ぶ高層建築群や市内の大きなビル、大型映画館を見て度肝を抜かれたのではないか。しかし実はその多くが二〇年代後半から三〇年代に建てられたものである。

聶耳が上海に降り立つた時の様子は、一九五九年に建国十周年を記念して製作された映画『聶耳』の冒頭場面に出てくる。ただバンドのビル群は映し出しておらず、雑然とした波止場が描かれているだけである。

ここで当時の中国や上海をめぐる情勢を見ておきたい。

中国革命の出発点ともいうべき一九一九年の「五・四運動」。これは第一次世界大戦の戦後処理をめぐつて開催されたベルサイユ講和会議で日本の山東利権を承認した民国政府の態度を不満として起こったものである。これが全国的な運動に発展し、二年後の中国共産党の誕生を促す。

これより先に孫文は一九一四年に中華革命党（のちに中国国民党と改称）を組織、一九二一年には南の広州に新政府を打ち立てた。ロシア革命の成功に力づけられた彼は、二四年に中国共産党を受け入れ、「連ソ・容共・労農援助」の新政策を打ち出した。ここに国民党と共産党の第一次合作が成立した。しかし日本をはじめ列強の執拗な干渉に念願の中国統一はかなわず、二五年三月に「われ国民革命に力をいたすこと四十年、革命なおいまだ成功せず、同志は継続努力し、目的を貫徹されよ」の遺言を残して北京で死去する。

同年五月、上海の日本人が経営する紡績工場でストライキが行われ、日本、英国、さらに軍閥の警察が弾圧を加え死傷者が出た、いわゆる「五・三〇事件」が発生する。この事件をきっかけに中国の反帝国主義運動は大きく盛り上がることになる。

広東省に拠る国民党は七月に国民政府の成立を宣言し、国民革命軍を組織した。翌二六年七月、蒋介石を総司令官と

する国民革命軍は、帝国主義諸国と結んだ北方の軍閥打倒と中国の統一をめざして広州から北伐を開始する。民衆に支持された国民革命軍はわずか半年で長江流域に達し、翌二七年春には、上海、南京をも陥れた。

しかし北伐が進むにつれて労働者や農民の意識が高まり、共産党をふくむ左派勢力が力を増してきた。これに対し外国勢力や国内の右派勢力は、恐れをいだきはじめる。蒋介石はもともと上海の金融資本を中心に浙江財閥と結びつきを強めていたので、左派勢力の進出には神経を尖らせていた。蒋介石は二七年四月に共産党を弾圧して、労働者の大虐殺を行った。これが武漢にあつた国民政府の指弾を受けると、南京に別に国民政府を樹立する。蒋介石は北伐を続け、翌二八年六月には日本の支持を受けていた東北軍閥の張作霖を北京から追い出し、中国の統一を完成した。

しかし以後の国民党政府はソ連と断交し、英、米と結ぶ一方、国内では地方軍閥と妥協したので、政治の腐敗や社会の反封建的な仕組みはなお続いた。これに対し蒋介石の弾圧で大打撃を受けた共産党は、農村に根拠地を移し、紅軍を組織する。そして地主から土地を奪う土地改革を進めながら、江西省を中心に勢力を伸ばし、三一年十一月には瑞金に毛沢東を主席とする中華ソビエト共和国臨時政府を樹立した。蒋介石はこれとの闘いに全力を傾け、激しい内戦が続いた。

上海では民族主義的な抵抗運動が高まってきた。聶耳が昆明から出て来る四ヶ月前の一九三〇年三月に中国共産党の指導により左翼作家連盟が誕生している。以後、中国左翼劇作家連盟、社会科学者連盟、美術家連盟などの文化団体が相次いで組織化される。これら団体の中心人物は、夏衍、沈西苓、田漢であり、いずれも日本への留学経験をもっていた。同年十一月七日のソビエト革命記念日に、これら文化団体の連合組織として結成された中国文化界総同盟による大規模デモが企画された。この時、すでに警察の警備が極端に厳しくなり、大規模な集会やデモは不可能になっていた。そこで運動家たちは人が集まるところでアジビラをばら撒き、夜間に建物の壁にビラを張りつけるなどゲリラ戦法を展開した。聶耳もこうした運動に心が引かれた。しかし仕事に追われ、それどころではなかった。運動に寄せる思いを聶耳

は日記に次のように書いている。

「十一月七日」は私の中で大きな位置を占めていた。私はそれに無限の希望と喜びを感じていた。新聞の報道にも注意を引かれざるを得なかった。今日Tさんが《申報》を買って来た時、私の目にまず飛び込んだのは「十一月七日」に関する部分だった。私の心は弾み、まるで世界一周を終えた飛行家が無事に帰着した時の興奮と喜びを感じるようなものであった」^③

ソビエト革命が貧しい人たちや進歩を求める多くの人々に輝きを与えていた時代のことである。

三、上海時代・前期

こうした時代の中で、聶耳は上海で新生活のスタートを切った。勤務したたばこ卸商の「雲豊申荘」はバンドがある蘇州河の南側ではなく日本租界があった北側虹口の公平路に面していた。二〇〇二年夏、筆者が訪れた時、建物は普通の民家として使用されていた。周辺は古い町並みがプラタナスの並木とともに残されているが、いずれ再開発が進み、この建物も取り壊されるであろう。雲豊申荘は老板（主人）を含めても三人の小規模商店だった。聶耳は毎日忙しくあちこち駆けずり回り、帳簿づけなどに追われていたようだ。

映画『聶耳』では聶耳の友人だった趙丹が、撮影当時、四十歳を優に超えていたが若い聶耳役を熱演し、当時の彼の生活を彷彿させてくれる。聶耳は住み込み店員として当初は無給。一ヶ月が経過してからは毎月十五元をもらえることになったが、生活はぎりぎりだった。こうした生活の中でも好きなバイオリンの独習は続けていたし、英語と日本語の勉強を続けているから驚く。その年の暮れ、同郷の友人の紹介で中国共産党が指導する大衆組織「反帝大同盟」に参加

するようになっていた。

翌年三月、雲豊申荘の昆明にある本社が脱税容疑で摘発され、多額の罰金を科せられたため倒産に追い込まれた。その結果上海支店も経営が破綻し、聶耳は失業してしまう。昆明に帰ることもできず途方にくれたが、まもなく新聞「申報」に映画会社―聯華影業公司付属の音楽歌舞学校が練習生を募集している広告を見つけ、早速応募する。試験の結果バイオリン奏者に採用された。好きで続けていたバイオリンが身を助けた。日頃の精進のたまものである。音楽好きの聶耳にとって願ってもない職場であつた。

この歌舞学校はもとも明月歌劇社といい、童謡作曲家として知られる黎錦暉が結成した劇団であつた。黎錦暉は聶耳のどの伝記でも退廃的な音楽を広めたとして評価が芳しくないが、『中国近現代音楽家傳⁽¹⁾』によれば、彼は聶耳が兄事した田漢と同郷の湖南省湘潭出身で、幼くして音楽の才能を発揮し、郷里で音楽教師をしたあと、北京大学の聴講生となつた。音楽を通じて新文化運動を志し、子ども向けの作品を数多く作つた。孫文の死を悼んだ「總理紀念歌」（中国語の記念は日本語の記念と同じ）、「麻雀与小孩」（雀と子ども）、「小小画家」（小さな画家）等が全国的に大流行した。革命闘争で亡くなつた烈士の遺児を引き取り、自分が設立した明月歌舞団で育てるなど面倒見がよく、大勢のスタッフを抱え経営的にはいつも苦しかったようである。甘い恋の歌を数多く作つて青少年に悪影響を与えているとして聶耳に批判されるのだが、それは組織維持のための資金稼ぎの意味もあつたのではないかと思われる。

聶耳が入つた当時、もとの明月歌劇社が上海聯華影業（映画会社）公司と提携して付属学校となつたばかりだつた。この提携にはこんな背景がある。上海は中国における映画の発祥の地であるが、二〇年代になると、民族資本による明星大中華、天一などの映画会社が相次いで設立された。当初は無声映画であり、俳優は演技さえできればよかった。しかしトーキーの時代になると、地域によつてまったく違つた言葉になつてしまふ中国では正しい標準語が話せることが俳優として必須条件になる。その点を早くから理解していた黎錦暉は、標準語教育をしつかりと行つたので、明月歌劇社

は俳優養成所としての役割を担うようになっていた。^⑤ 明月歌劇社のあつた愛文義路一二九号は現在の北京西路一二九号でレンガ造り二階建ての建物が現存している。

翌三二年九月十八日夜、日本の関東軍が奉天（現在の瀋陽）北郊外の柳条湖で南満州鉄道の線路を爆破する謀略事件を引き起こした。いわゆる「満州事変」の発端である。この爆破は、実際は関東軍の独立守備隊が爆薬を仕掛ける工作を行ったが、守備隊はそれを隠し、あたかも中国の東北辺防隊が仕掛けたように見せかけ、逆に辺防隊の陣地がある北大営を攻撃した。関東軍としてはともかく戦線を拡大する口実が欲しかった。これらはすべて関東軍作戦参謀の石原莞爾中佐らが策定したものである。関東軍はかねての計画と準備に基き東北部占領の軍事行動を起こした。

中国東北部に対する日本の攻撃は、中国の民衆を憤激させ、なかでも上海では日本に抗議する集會が頻繁に開催された。聶耳は「満州事変」について九月二〇日の日記に、その日の新聞を読んで次のように書いている。

「今日、九月二十日、もっとも注意をひいたのは、『日本軍瀋陽を占拠、南満州鉄道を爆破、…東北軍王以哲旅長殉死』という大きな活字であつた。これは一昨日夜に起きたことだ。日本の中国侵略は予想どおりのことだつた。万宝山、中村失踪などの事件を見よ、これは日本が仕組んだ陰謀ではないか。いま大胆にも大事を引き起こし東北を占拠、その帝國主義的な暴挙をほしきままにしている。空港、兵器工場はみな占拠されてしまった。（中略）職場での食事の時、皆がこのことについて話題にした。彼らの論議はつまるところ国家主義的な考えにすぎず、今回の事件が第二次世界大戦の必然的な動機と引き金になることを理解できない。いまだどのような方法があるのか？誰かにお願いして解決するなんてとんでもない！何が国際連盟だ、そんなものはまったくの役立たずだ」^⑥

民衆が怒つたのは、日本の武力侵略そのものに留まらず、国民政府が不拡大方針をとつたことだつた。蒋介石は国際連盟が「有効な制裁措置」をとってくれることを期待したが、日本軍の軍事行動は、錦州無差別攻撃、黒竜江進撃と拡大し、国際的な「公理の裁決を待つ」方針は破綻してしまつた。

こうした時期であつたが、聶耳はこの頃イタリア籍の個人教授ブドシユカについてバイオリンを学んでいた。学費は高く、その捻出にはいつも苦勞しなければならなかつた。

「満州事変」後、日本側では中国側が後退に後退を重ねたことに氣をよくして、また世界の目を東北部からそらすために、翌三二年一月に上海で日本人僧侶襲撃事件を演出し、居留民保護の名目で三千人に近い陸戦隊を共同租界に上陸させた。さらに一月末には一方的に租界外に部隊を展開し、警備していた中国側と衝突し、戦火の火ぶたが切られた。いわゆる上海事変である。

上海に駐屯して抗日意識の高かつた十九路軍の兵士たちは、蒋介石による上海撤退命令を拒否し上海市民とともに抵抗に立ち上がった。戦火に家を焼かれ逃げ惑う同胞の姿を目の当たりにして、聶耳は自らの進むべき道について考えざるを得なかつた。戦火の中で迎える二十一歳の誕生日を前に彼は日記にこう書いている。

「どうしたら革命のための音楽ができるのか？ 丸一日考えていた。しかし具体的には思いつかなかつた。クラシック音楽など是有閑階級のお遊びではないのか？」「一日何時間もかけて苦しい練習をし、何年後、何十年後に一人前のバイオリニストとして成功したとしても、それがどうだというのだ。ベートーベンの「ソナタ」を演奏して、人々を元気づけることができるのか、苦勞している民衆の気持ちを奮い立たせることができるのか」そして聶耳の得た結論は、「この道は行けない、早く目覚めよ！」ということだつた。

戦争の拡大は映画の興行に大きな影響を与え、映画会社はどこも観客動員どころでなくなつた。聯華影業公司も人員削減を決定し、三月末に付属歌舞学校は解散となつてしまつた。黎錦暉は明月歌劇社を復活させることにし、自身が全体の責任者を務め、他は十一人の執行委員による集団指導体制となり聶耳もその一人に選ばれた。

四月二十二日、聶耳は中国左翼演劇家連盟の責任者であつた田漢と会う。田漢は、日本の東京高等師範学校（後の東京教育大学―筑波大学）出身の劇作家で中国新劇運動の開拓者。佐藤春夫をはじめ日本の作家とも広く交友関係を持ち、

すでに名を成していた大物文化人であった。聶耳にとってこの田漢との出会いこそが、彼の運命を決定付けた。のちに数多くの田漢作詞、聶耳作曲の歌曲が人気を博すことになる。国歌となった映画『風雲児女』（嵐の中の若者たち）の主題歌「義勇軍進行曲」もそのうちのひとつである。

聶耳は大好きな音楽を仕事とすることができ、当初は喜んでいたが、次第に歌劇社での仕事に疑問をいだくようになる。黎錦暉がペンネームで発表し大流行した「毛毛雨」（こぬか雨）、「妹妹我愛你」（われ君を愛す）、「愛神的箭」（キューピッドの矢）、「春深了」（春たけなわ）などの歌曲に対し、聶耳はその通俗ぶりに違和感を覚えざるを得なかった。

五月、明月歌舞社にしたがって、聶耳は船に乗り南京、漢口（武漢）の公演に行く。出し物の内容は当時の社会の現実から離れ、大衆が求めている愛国的思いを反映していなかったこと、また練習も十分でなかったことから、公演は失敗に終る。聶耳は明月歌劇社のあり方を改革せねばならないと日記に書いている。映画『聶耳』では抗日の闘いで負傷した兵隊たちを病院に慰問した歌劇社の一行が、黎錦暉の作品を歌ったところ反発をかい聶耳が急遽、フランス国歌「ラ・マルセニーズ」を歌い大きな拍手に包まれる場面がある。これは聶耳の日記に記された気持ちを表現したものでろう。

この頃、中国左翼演劇家連盟が評論活動を重視する方針を打ち出したことから、聶耳はペンネームで新聞雑誌に評論を書くようになった。七月の『電影芸術』に黒天使のペンネームで、「中国歌舞短論」を発表して、オーナーの黎錦暉を強烈に批判した。その内容は、黎錦暉の作品は反封建的な要素があり、貧富の格差という階級矛盾を描いていることを認めながら、しかしいま民族の危機存亡の時、あまりに彼の作品は「歌舞のための歌舞」になっているのではないかと興行成績を求めるために市民層に程度の低い音楽を押し付け、青少年に有害な音楽を提供していると難じた。

「我々の必要としているのは、軟らかな豆腐ではなく、命をかけて闘う筋金入りの魂なのだ」と主張し、二十歳ほども年上の黎錦暉に対し、「大衆の中に入れば、あなたは新鮮な題材を得、新鮮な芸術を創造するだろう。さあ努力だ、

それが時代の道というものだ」と、⁽⁸⁾ 気炎を吐いている。

明月歌劇社の中では最初「黒天使」とは誰のことか分からなかった。それが聶耳だと分かると黎錦暉本人よりもむしろ周辺から非難の渦が巻き起こり、結局聶耳は停職処分を受け明月歌劇社にいらなくなってしまった。二度目の失業である。

同年八月七日、聶耳は船に乗り上海を離れ、天津を経由して八月十一日に北平（現在の北京）に到着した。北京では雲南省が出身者のために設けている宿泊施設―雲南会館に身を寄せた。雲南会館は地下鉄二号線の宣武門駅近くの校場头条胡同に、二〇〇三年末現在、普通の民家として残されている。

聶耳は到着当初は同郷の友人たちと故宮や北海、郊外の頤和園、香山などの名勝旧跡に遊びに行った。またしばしば下町の天橋という繁華街に行き演芸を見たりしている。

九月中旬から上海左翼演劇家連盟の紹介により、北平左翼演劇家連盟や左翼音楽家連盟関連の公演や組織建設活動に参加するようになった。北平左翼演劇家連盟の機関誌『演劇新聞』に「上海の映画界について」の原稿を書いた。また清華大学東北同郷会の抗日義勇軍のためのチャリティーショーに参加し、「インターナショナル」をバイオリンで独奏した。

北京ではかねて憧れていた国立北京大学芸術学院を受験したが不合格だった。伝記作者は、作文の課題だった「国民党の党義について」、聶耳が出題者の期待に応える要領の良さを持つていなかったため落第したと記している。

一方でバイオリンの練習意欲は衰えることなく、北京滞在の間にロシア人トノフを訪れ、個人レッスンを受けた。しかし長い間仕事についていなかったため、すぐに学費が払えなくなってしまった。これ以上の滞在は無理と判断し、寒さが本格的になる前の十一月八日、汽車で上海に帰った。北京滞在は三ヶ月であったが、北平左翼演劇家連盟メンバーとの交流を通じて、聶耳はこの間に思想的に大きく成長したといわれる。

四、上海時代・後期

上海に戻った聶耳は、友人たちの世話により明月歌劇社がかつて所屬していた映画会社、聯華影業公司に入社した。最初の仕事は年末映画『除夕』（除夜）の記録担当だった。その後映画音楽の仕事にまわり、創作・評論活動に本格的に携わるようになった。

「映画はあらゆる芸術の中でもっとも重要」だというレーニンの言葉はよく知られているが、中国共産党の映画指導グループは、映画の影響力に注目して進歩的映画の制作に取り組み、これはという人物を送り込んでいたのである。

一九三三年の年初、聶耳は田漢を紹介人に、夏衍の立ち会いのもと中国共産党に入党した。またこの春、田漢の紹介で党が指導する大衆組織——ソ連の友社音楽グループに参加する。このグループはメンバーこそ少ないが、呂驥、張曙、任光、安娥などがおり、なかなかがつちりした陣容だったという。^⑨

この頃、革命音楽の発展を図るために任光らと相談して「中国新興音楽研究会」を組織した。立派なピアノがある任光の家で革命音楽の創作について一緒に研究をした。

「中国の新興音楽とは何か」、これについて聶耳は、「音楽などの芸術は詩、小説、演劇と同じように大衆に代わって叫び続けるものでなければならない。大衆は必ず音楽の新しい内容と演奏を求め、作曲家の新たな態度を求めるようになるにちがいない」「旧時代の作曲家たちは革命前に確立した方法をそのままにして作曲を続けている。一方、革命が生み出した新時代の音楽家たちは、生活と芸術に対する異なった態度にもとづいて生命を注ぎ込んでいる」と日記に書いている。^⑩

二月九日、党の映画指導グループは、大衆組織「中国映画文化協会」を結成した。聶耳は執行委員兼組織部の幹事に

選ばれた。

聯華影業公司の職員には、自社の映画に「その他大勢」の役で必要な時に出演する規定があった。このためこの頃、聶耳は『城市之夜』（都市の夜）、『体育皇后』（スポーツの女王）、『小玩意』（小さな玩具）などの映画にバイオリン弾きや運動会での医師、町の豆腐売りなどに扮して出演した。

三月二十一日、聯華影業公司一敵の音楽係主任となり、映画の配音担当のほか俳優の歌唱指導に当たる。

三月中旬から六月下旬まで、田漢脚本の映画『母性之光』の制作に携わる。五月中旬にロケで杭州に行く。映画は音楽家父娘の物語だが、聶耳は舞台となる南洋の黒人鉱夫の役を買って出る。全身を絵の具で真っ黒に塗り、みごとに群衆役を演じた。聶耳は田漢作詞の挿入曲「開鉱歌」の作曲を担当した。これが田漢との最初のコンビ作品となった。

わしらが汗水流すとき　あの人たちは風にあたつて涼をとる

わしらが腹ぺこで餓えているとき　あの人たちはうまいものを腹いっぱい

わしらは年中お日様も見えないのに　あの人たちは水銀灯さえ明るくないと不平を言う

力強くはつらつとした旋律は多くの人々に鮮烈な印象を与えたと、『中国電影發展史』^[1]に記されている。

この頃、聶耳は民間歌謡を革命音楽に何とか取り入れられないかと考えていたようで、母親や故郷の友人宛の手紙の中で俗謡、山歌など農村や山村で野外労働をする時の歌の収集を手伝ってもらいたいと書いている。

八月、会社のシナリオ起草委員会に頼まれ、以前書いた映画シナリオ『時代青年』を『前夜』として書き改めるが、これは作品となつて上映されることはなく、シナリオ作家としてのデビューは叶わなかった。

九月十九日、映画『漁光曲』の配音を担当するようになり、監督蔡楚生らにしたがい、浙江省の石浦にロケに行く。

このロケの期間中、聶耳はそれまでの過労が重なって病気になってしまい、一行より早く上海に戻って二ヶ月間の休養を余儀なくされた。

同じ秋、左翼劇連組織の上演した一幕劇『飢餓線』に挿入曲「飢餓交迫之歌」（飢餓迫る歌）を作る。さらに新聞売りの少女との出会いから発想した児童歌曲「売報歌」（新聞売りの歌）を作曲した。「ラララ！ラララ！私は小さな新聞売りよ……」で始まる軽快で明るい調べは、いまでも子供たちによく歌われている。

十一月、上海の映画界を震撼させる大きな事件が起きた。国民党蒋介石政府は共産党支配地区に対する第五次軍事包囲作戦と同時に、国民党支配地区の左翼の文芸運動に対して包囲作戦を展開していた。この作戦の一環として、十二日、国民党の暴徒三十四余名が、田漢と関係が深かった芸華影業公司の撮影所に乗り込み、「各映画会社、映画館は黄子布（夏衍）、陳瑜（田漢）、金焰らが製作し、監督し、出演した、階級闘争、貧富の対立を吹き込む映画フィルムを撮影し、上映することをゆるさない、然らざれば、必ずや暴力手段に訴えるであろう……」と書いた「上海映画界反共同志会」のビラを撒いたのである。¹³

芸華影業公司が襲撃された後、制作会社だけでなく映画館へも警告文が送られた。

このような状況の中で聶耳は積極的に左翼文芸活動に参加し、権力側との闘争を続けたので、聯華影業公司は彼の解雇を考えた。聶耳がしばらく前、過労のため倒れたことから休養しろという名目で翌年一月二十四日、彼を解雇した。三度目の失業である。

聶耳は上海に帰ってから、再び外国人教師についてバイオリンを学んでいた。だが正規に学校で学ぶ夢が捨て切れず、同年二月、上海国立音楽専科學校を受験した。しかし合格しなかった。日記にはただ「音専失敗」とある。伝記作者は、ここでも学校側が、聶耳が左翼活動を理由にクビになったことを知っていたからだろうと推測している。

聶耳は党の斡旋で、同年四月、百代唱片（レコード）公司に入り、任光とともに音楽部の責任者となって進歩的歌曲

の制作に携った。百代唱片公司は中国でもっとも早く營業を開始したフランス資本のレコード会社である。発足当初は中国の伝統音楽などを録音して人気を集めたが、三〇年代に入り、当時としては最高の録音技術と設備を備えた会社として様々な作品を世に送った。この会社は外国資本のため、国民党政府の干渉が及ばず、聶耳たちは、映画音楽あるいは流行歌曲という名目で革命歌曲を多く録音、レコード化することができたのである。

この頃、中国左翼劇作家聯盟音楽小組が成立した。聶耳のほか、張曙、任光、呂驥、安娥など青年音楽家、作詞家が集まり、聶耳が責任者に選ばれた。

中国の民族器楽の合奏を発展させるために、聶耳ら指導グループは五月、百代国楽隊を作った。演芸会で何度か彼のアレンジした雲南に伝承する民間音楽「金蛇狂舞」、「翠湖春曉」などの民族器楽が演奏され、大いに好評を博した。その後、これらは百代唱片公司からレコード化され発売された。

五月から六月まで東南アジアの紹介記録映画『南洋太観』および『漁光曲』の音楽を担当した。映画『漁光曲』（蔡楚生監督、聯華影業公司）は、漁村の貧しい家に生まれた双子の姉弟を主人公に、虐げられた人々と社会の不合理を描く同名の主題歌は任光の作曲によるもので、漁民姉弟の哀切な歌声を繰り返すことより、厳しい労働と搾取の犠牲になった人たちの貧しい生活をリアルに描き、映画のテーマを引き立てている。映画は三ヶ月近くのロングランとなり、映画から生まれた歌曲として「漁光曲」は最大のヒットとなった。

この後、聶耳は田漢作の歌劇『揚子江暴風雨』の演出を担当し、劇中歌「打磚歌」（レンガ造りの歌）「打桩の歌」（くい打ちの歌）「碼頭工人歌」（波止場労働者の歌）、「苦力歌」「クーリーの歌」（後に「前進歌」と改める）など四曲を作曲した。前の三曲は魯迅に可愛がられた詩人の蒲風の作詞。最後の「苦力歌」は田漢の作詞によるもの。さらに聶耳はこの劇の主役、波止場で働く労働者「王爺さん」を演じている。この劇は彼らの過酷な労働と悲惨な生活、まさに清末に高杉晋作が見たままの半植民地上海の状況を劇化したものである。聶耳は労働者たちが重い麻袋や大きな木箱を背負つ

たり、「エイヤーホ」「エイヤーホ」とあえぎながら運ぶ様子を實地に調べ、彼らの叫び声を曲に取り入れ、貧困にめげず力強く生きるエネルギーを表現しようとした。躍動するセリフと歌で織りなされた新しい表現方式で人々の注目をあび、大好評を博した。

国民党の弾圧に反撃するため、党の映画グループは互いに協力して左翼文芸運動の新拠点として新たに映画会社、上海電通影片公司を創設した。七月、聶耳はこの会社の最初の作品、袁牧之脚本の『桃李劫』（教え子の不運）のために主題歌「畢業歌」（卒業の歌）を作った。この映画は希望に燃えて建築学院を出た青年が、正義感が強いがゆえに社会に受け入れられず破滅してしまう悲劇を描いたもの。聶耳は理想と愛国心に燃えて学園を巣立つ若者のイメージを明るく歌い上げ、また青年が官憲に捕らわれて以後は、足かせの音、銃声などサウンド効果を意識して使い、悲愴感を表現した。この主題歌は広く人々に受け入れられ大流行した。『聶耳伝』著者は、この曲への高い評価をしている韓立文という人の次の文章を紹介している。

「聶耳の歌曲は鮮やかな音楽形象と時代感に富んでおり、人民の心の声を反映し、前進する時代の歩みを体现している。聶耳の歌はわが国の広範な大衆の革命的な熱情と闘志を奮い起こさせ、無数の青年たちが抗日の前線に赴き、祖国のために侵略者に向かって突撃し、勇気を奮い起こして戦うよう呼びかけ鼓舞した」¹³

聶耳はこの頃、友人賀綠汀の紹介で、翌年の出国前夜までずっと国立音専のロシア人教授オクサコフについてピアノと作曲理論を学んでいた。

八月から九月まで聯華影業公司二廠が撮影した映画『大路』（大いなる道）（孫瑜監督）の主題歌「大路歌」（孫瑜作詞）と挿入歌「開路先鋒」（孫師毅作詞）を作曲した。この映画は軍需物資を運ぶ道路建設に従事する若者たちの物語。主題歌「大路歌」は、聶耳が孫瑜監督からの「ボルガの舟歌」のような悲壮な調子のものという求めに応じ、建設現場で多くの労働者と一緒にローラーを曳き、彼らの生活を体験して作曲した。掛け声などを多用し、重労働を表現しながら

らも団結の喜びと希望を感じさせる曲で、この映画が翌年の元旦に封切り上映されると、大変な反響を得ることとなった。各地から主題歌「大路」の楽譜を求める手紙がしきりに届き、聶耳の名を一躍世に知らしめることになった。

十月十三日、任光と共に最初の「百代新声会」を開催し、百代公司が新しくレコーディングした「畢業歌」、「大路歌」、「開路先鋒」などのレコードを放送し、進歩的歌曲の宣伝とその拡大に努め、いわゆる退廃的な音楽に対抗した。

同じ頃、芸華影業公司の映画『飛花村』のために主題歌「飛花歌」と挿入曲「牧羊女」を作曲した。これをアメリカ系資本の勝利公司以レコード化したことから、聶耳は百代公司のマネージャーから責任を追及され、十一月末、百代公司を退職することになる。

年末、王達平のペンネームで「一年来の中国音楽」という総合的な評論を書いた。この年の映画、ラジオ、出版、演奏など、中国音楽界の各方面の状況を総括したものである。自らの作品が広く人気を博している自信から「大路歌」、「開路先鋒」などの作品を高く評価し、「新音楽の新しい芽はたゆみない成長を遂げ、流行俗曲はもはや避けることのできない末路にさしかかっている。大衆化された音楽は映画を通じてに広汎な大衆に歓迎されている」と書いている。⁽¹⁾

一九三四年から三五年にかけて聶耳の創作活動は頂点に達した。

一九三五年一月、聯華影業公司二廠の音楽主任に迎えられる。以前クビになったのは一廠で一応別の組織になっていた。同社の映画『新女性』の吹き込みと主題歌「新女性」の組曲を作る。映画『新女性』は大会の上海で音楽教師の傍ら女流作家をめざす主人公を次々と苦難が襲う物語である。脚本と歌詞を書いた孫師毅は、ストーリーを一女性の悲劇話に終わらせず、当時の多くの女性たちが置かれていた状況を明らかにすべく最終の場面では、胸を張って紡績工場に向かう女性労働者の群れをもってきた。

「新しい女性、それは生産に生きる女性、新しい女性、それは社会の労働者……」力強い旋律で新しい時代の女性の姿を生き生きと表現した。聶耳はいつものように現場主義をとって紡績工場に赴き、彼女たちの労働や生活を観察し、そ

のたくましさを表現しようとした。

清新の気も高らかにこの組曲を歌いこなすため、聶耳はアマチエア合唱団の必要性を痛感し、団員集めや試験などすべて一人でやって「聯華声楽団」を組織した。映画は人気女優、阮玲玉の役にはまり込んだ演技により好評だった。だが阮玲玉自身の恋愛をゴシップ新聞のエサにされ、意地悪い非難中傷をあびた彼女は、三月八日の国際婦人デーを選んで自殺してしまった。その葬儀には何万もの群集が参加し、映画のヒロインと同じように時代の犠牲になった彼女を悼んだ。

一月、田漢の書いた三幕ものの新劇『回春之曲』のために「告別南洋」（さようなら南洋）、「梅娘曲」など四つの挿入曲を作った。

一月三十一日から二月二日まで、左翼劇作家聯盟が「上海舞台協会」の名義で組織した盛大な演劇公演に参加する。聶耳は、『回春之曲』の中で歌う歌曲を俳優たちに指導したほか、上演時はさらに舞台の横で六弦琴を弾き、あわせてオーケストラを指揮して歌唱者のために伴奏した。

二月、芸華影業会社の撮影した映画『逃亡』のために、主題歌「逃亡曲」（のち「自衛歌」と改名）、挿入曲「塞外村女」を作った。また会社が新たにクラクインした映画『凱歌』の主題歌「打長江」、挿入曲「採菱歌」を作曲した。

『桃李劫』（教え子の不運）で成功を取めた新しい映画会社、電通影片公司は三四年末、引き続いて田漢に抗日と救国をテーマにした映画シナリオの執筆を依頼した。これが日本軍の占領を逃れ、東北から上海に流れ着いた二人の大学卒業生が、民族存亡の危機に際し、一人は勇敢に、一人は迷いながらも最後は万里の長城付近の前線での戦いに向かうさまを描いた『風雲児女』（嵐の中の若者たち）である。当時国民党当局の政治弾圧は日増しに激しくなり、二月中旬に田漢は陽翰笙ら党組織に属する作家とともに逮捕されてしまった。

そのため映画の台本に仕上げたのは夏衍である。主題歌の作曲が求められているという話を聞いた聶耳は、すぐに夏

衍を訪ね自分から申し出てこの作曲をやらせてもらった。祖国存亡の危機に際しているにもかかわらず、無抵抗を決め込む国民党に怒りを感じていた聶耳は、その思いを表現すべく文字通り寢食を忘れて作曲に取り組んだ。二ヶ月余り構想をねり、田漢作詞の主題歌「義勇軍進行曲」を作曲した。さらに監督の許幸之に乞われて彼の作詞による挿入曲「鉄蹄下的歌女」（戦場の歌姫）を完成させた。

この「義勇軍進行曲」は抗日戦争のみならず、その後の国民党との内戦―解放戦争を通じて民衆や戦場に赴く兵士たちに歌われ愛された。そして暫定国歌を経て現在は正式国歌として憲法にも明記されている。

映画『桃李劫』（教え子の不運）、『大路』、『新女性』が相次いで上映され聶耳の歌曲は急速に民衆の間に広まり、国民党政府は彼の作曲活動に対しにわかに神経を尖らせ始めた。それだけ彼の音楽の影響力が強かったということである。四月一日になって国民党政府が聶耳を逮捕するとの情報が飛び込んできた。党組織は、才能に恵まれた青年音楽家を守り、彼の能力をさらに伸ばすため、彼が日本を経て欧州に行き、ソ連で学べるよう支援し、手筈を整えた。聶耳はこの機会を利用して音楽の道を究めることにした。当時、党組織は相次ぐ弾圧で壊滅的な状態に置かれていたとみられるが、夏衍によればその程度の経済力はあったという。

聶耳は周囲の友人には日本の大阪へ行き、牛皮の商売をしている三番目の兄を手伝うと説明していた。この時、兄はすでに昆明に戻っていたのだが、そう言いつくろった。四月十五日、聶耳は上海の埠頭から日本郵船の定期船「長崎丸」に乗船し日本に向かった。

五、終わりに

その日本は、軍部が益々台頭して戦争拡大への道にまっしぐらに進んでいた。美濃部達吉東京帝国大学教授の天皇機関説が貴族院で攻撃され、衆議院では国体明徴決議案が満場一致で可決された。大陸への野望をいなく陸軍は、強引に梅津・何応欽協定を中国政府に承認させて河北一帯を押さえた。陸軍内部の対立から真崎甚三郎教育総監が罷免され、八月十二日には永田鉄山軍務局長が斬殺され、翌年の二・二六事件へと血生臭い事件が続く。

一方の中国は、国民党の弾圧にもかかわらず民衆の抗日の動きはますます活発になり、八月一日に中国共産党は「抗日救国のために全同胞に告げる書」、いわゆる「八・一宣言」を出し、「すべての者が内戦を停止し、すべての国力を集中して抗日救国の神聖なる事業に奮闘すべき」と呼びかけた。「義勇軍進行曲」をはじめ聶耳の歌曲は、その頃から盛んになってきた抗日のための愛国合唱運動⁽¹⁵⁾の中で歌われ、日本軍との戦いに赴く兵士を鼓舞激励したのである。

聶耳は日本軍国主義との戦いを鼓舞する歌曲を次々に作曲し、強い支持を受けた。ではその歌曲の力強さはどこから生まれたのか。彼は優れた資質をもった青年ではあったが、作曲という極めて専門的な知識・技術が必要とされる分野で正規の教育を受けてこなかった。古今東西、専門教育を受けていない著名な作曲家がいるかどうかは寡聞にして知らない。ただ中国では同時代に活躍した任光や冼星海などは国外で学んでいる。聶耳も正規の教育を受けようと二度受験を試みたが失敗した。これはすでに書いたとおりである。

しかし彼には、人々がいままきに必要としている歌曲を作りたいという強い思いがあった。貧しかった少年時代の日々、母の故郷でみた差別される少数民族、学生時代、恩師が刑場に引かれてゆく様子。それらが走馬灯となって記憶によみがえる。聶耳は三〇年代の上海で、日本という敵、蒋介石という反革命勢力を前にして、どう戦うか、その思い

を五線譜にたたきつけた。

聶耳の、暗い時代にあつても常に明るさを込めた旋律は民衆の心を強く捉えた。彼の大衆主義、現場主義は、のちの毛沢東による延安における「文芸講話」¹⁶を先取りするものでもあったと言える。

今年八月にギリシャのアテネで開催されたオリンピックでは、中国国歌「義勇軍進行曲」が何度も演奏された。表彰台に上った優勝者はもともと行進曲として作られた勇ましい曲に唱和していた。その様子をテレビで見ながら、抗日戦争を主題にした映画音楽が国歌として、いまなお中国の人々に歌い継がれている現実の中で、我々は日中関係のあるべき方向を見出さねばならないと考えた。

注釈および引用

- (1) 「回憶我們的四弟聶耳」『人民音楽』一九五五年十月号
- (2) 上海電影制片廠の一九五九年の作品。この映画はVCDで見ることができる。
- (3) 聶耳全集編集委員会編『聶耳全集』下巻 文化芸術出版社・人民音楽出版社 一九八五年 二四八頁
- (4) 向廷生「兒童歌舞劇的創始者 作曲家黎錦暉」中国芸術研究院音楽研究所編『中国近現代音楽家伝』春風文芸出版社 一九九四年 一七九頁—一九〇頁
- (5) 正しい標準語が話せることが俳優の必須条件になってきた状況については、榎本泰子『楽人の都上海』（研文出版 一九九八年 二〇二頁）による。
- (6) (3) 三〇七頁
- (7) (3) 三六五頁
- (8) (3) 四八頁
- (9) 『人民中国』一九五九年十月号 田漢「人民音楽家聶耳を憶う」

- (10) (3) 五一二頁
- (11) 李季華主編『中国映画発展史』第一卷 中国電影出版社 一九九二年(第四次印刷) 二六五頁
- (12) 夏衍 阿都幸夫訳『上海に燃ゆ―夏衍自伝』東方書店 一九八九年 一七〇頁
- (13) 王懿之『聶耳伝』上海音楽出版社 一九九二年 二六三頁 原載 韓立文「人民愛唱聶耳歌」―中国聶耳、冼星海学会『論聶洗』所収
- (14) (3) 八三―八七頁 原載『申報』一九三五年一月六日増刊
- (15) 抗日戦争の時期に全国的に展開された運動。民衆合唱会、余暇合唱団が編成され運動を担った。
- (16) 一九四二年五月に行われた毛沢東の講話。文芸は人民大衆のためのものであり、そのために作家たちが大衆の中に入るこ
とが強調され、長い間中国における文芸の方針として規定されていた。

参考図書・映像資料 (VCD)

- 汪毓和 中国近現代音楽家研究叢書『聶耳評伝』人民音楽出版社 一九八七年
- 王懿之『聶耳伝』上海音楽出版社 一九九二年
- 陳播主編『中国左翼電影運動』中国電影出版社 一九九三年
- 張駿祥・程季華主編『中国電影大辞典』上海辞書出版社 一九九五年
- 玉溪市芸術創作研究室聶耳研究室編『聶耳音楽作品集』遠方出版社 二〇〇〇年
- 汪毓和『中国音楽欣賞叢書―聶耳音楽作品』湖南文芸出版社 二〇〇三年
- 映画『大路』 聯華影業公司 (一九三四年作品) 大連音像出版社
- 映画『漁光曲』 聯華影業公司 (一九三四年作品) 大連音像出版社
- 映画『桃李劫』 電通影業公司 (一九三四年作品) 陝西文化音像出版社
- 映画『新女性』 聯華影業公司 (一九三五年作品) 陝西文化音像出版社
- 映画『風雲児女』 電通影業公司 (一九三五年作品) 陝西文化音像出版社

映画『聶耳』 上海電影制片廠（一九五九年作品）

貴州東方音像出版社

ここで聶耳の伝記についてふれておく。

死去五ヵ月後、一九三五年十二月に東京で印刷された『聶耳紀念集』所収の承箕「聶耳伝記」がもつとも早いもので要領よくまとめられている。

新中国誕生後は、洪遄「聶耳年表初稿」（『人民音楽』（一九五五年八号）がある。その後生

誕七十周年記念、没後五十周年記念などの機会に関係者による思い出などが書かれ、これらの蓄積をへてまとまったものが出来てきた。それは汪毓和の『聶耳評伝』（人民音楽出版社）であり、向延生「中華人民共和國国歌の作曲者——作曲家聶耳」（『中国近現代音楽家伝1』所収）である。前者は音楽の技術的な面にも詳しい。さらに一九九二年に出版された王懿之『聶耳伝』（上海音楽出版社）は、巻末にある関連資料リストの豊富さから伺えるようにこれまで発表された資料を丹念にあたっており、もつとも信頼できるものである。

本稿では伝記部分の記述については、向延生の「聶耳年譜」（『聶耳全集』下巻 五五〇—五六〇頁）を踏まえつつ、主に王懿之『聶耳伝』に拠っているところが多い。昆明時代の聶耳については先にふれた『回憶我們的四弟聶耳』のほか、崎松『聶耳与玉溪』（民族出版社 一九九九年）がある。

なお中国語からの翻訳は拙訳による。



上海市徐汇区の宝昌公園にある聶耳像
（愛国主義教育基地のひとつとして1996年に建設された）